

絵本三昧

(1) 絵本の作り手の視点から

宮地 敏子

真善美の探求そして希望。この絵本の魅力には
まっぴら長いこと過ごしてきた。まず三回に分け
て、第一回は、絵本の作り手の視点から、第二回
は、絵本の伝え手の視点から、第三回は、絵本の
使い手の視点からとして、おもむくままに絵本の
話をしてみたいと思う。

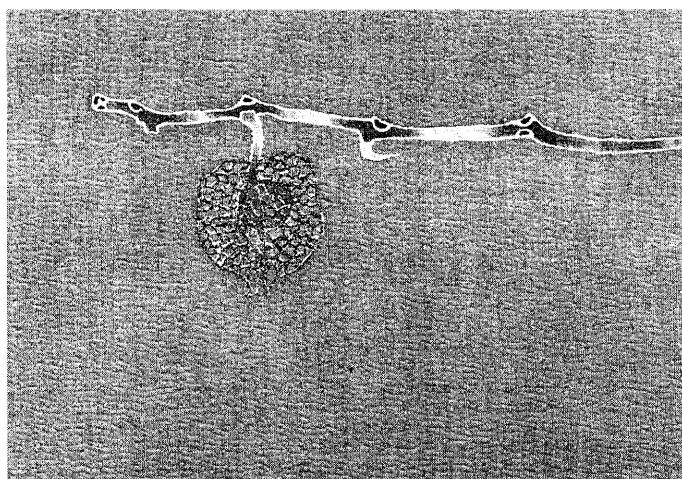
そして最後に、「絵本をあそぶ」と題して、卒

業生の保育実践から子どもたちが絵本を「あそ
んだ報告や保育者養成校の授業で『ぐりとぐら』
(中川李枝子文・山脇百合子絵 福音館書店)を
上演してきたことについて記したい。

さて、絵本を作ったといっても、四冊。詩もど
きの文を私が書き、染色を趣味にしていた母がそ
れに友禅染で絵を付けたものだ。『はなともだ

ち』（水上悦乃染・宮地敏子詩 かど創房）が初まりだった。限られた人しか見たことのない素人芸の友禅染の「ぬくもり」を、もっと多くの人特に子どもにも、美しい日本語とともに伝えられたらと思った。企画したのは、ちょうど息子二人がニューヨークで幼少期を過ごしていたときで、毎週届く祖母からの絵入りの定期便を孫たちが喜んだのがきっかけだった。明治生まれの日本語は、音読しても美しく響いた。自然の移ろいに敏感だった人の手紙には、季節の花がスケッチされ色が付けられていたのだ。

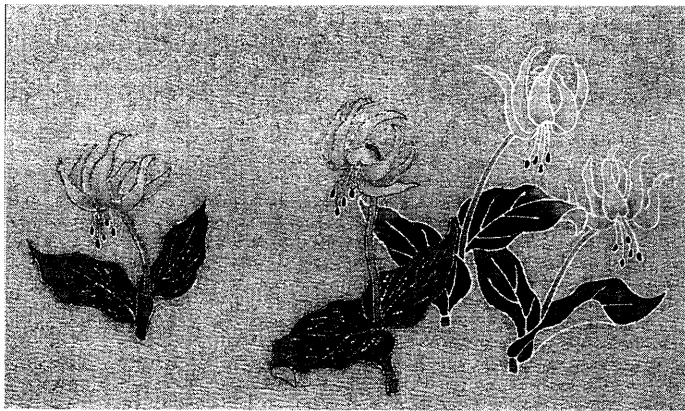
染色を趣味で始めて三十年、花のスケッチは小筆筒一杯たまっていた。十二の花を決めるのもその中から選べたが、ことはなかなか生まれなかった。幸い出版を引き受けて下さったのが、教育の詩人といわれた周郷博先生と親交があった方で、詩集を多く出しているところだった。彼には



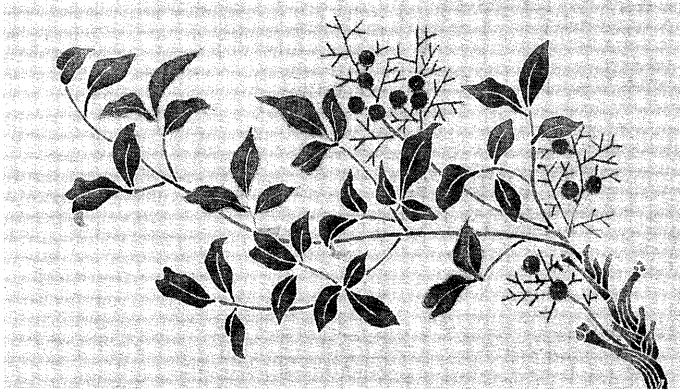
こぎつねさんの わすれもの
わたしの なまえは ほおずきちょうちん

ずいぶん励まされ鍛えられた。

十二か月の花暦と十二までの数を花で楽しもうとしたのだが、ことごと花が結び付かない。母は根っからの花好きで、体全体で花を分かっていた。いなかで自然と共に育ってきたからだ。私は目先と頭で花をとらえる。二月のふきのとうに、母は背景に芽立ちを描いた。土手で春のひざしを溜めて、芽立ちを準備するのを描きたいといった。それを受けてやつと私は「ひだまりにふたつ／ふきのとうふたつ」と書けた。野の草をこよなく慈しんだ人の四月は、かたくりのイメージだった。だからかたくりに踊ってもらった。「くるんくるん／かたくり　くるん／くるんくるん／あなたも　くるん」。六月はくちなし。取り木をして二十年もかけてふやした花だった。「はなは　くちなし／あなたは　どなた／はなは　ろくりん／あなたはいくつ」。九月の彼岸花はスケッチブック



くるんくるん　かたくり　くるん
くるんくるん　あなた　もくるん



ひよどりさん なんてんのみ いくつ
おしょうがつの ごちそう あといくつ

にはなかった。お墓花とか毒草とかで嫌われていたが、二人とも好きな花だった。こびとにとって
は燃えるジャングル。そうイメージした。私の希望する青と赤は沖繩の紅型で良く使われる色で、
母の染料のストックにはない色だった。たった一枚のために、一グラムもいらぬ色のために、私
に黙って染料屋に足を運んだ。十二月は、正月花として活けたい南天。ひよどり丸坊主に食べて
しまうので、毎年袋をかけていた。「ひよどりさん／なんてんのみ いくつ／おしょうがつの ご
ちそう／あと いくつ」。

この染絵の「ぬくもり」は、確かだったよう
だ。子守唄がわりにしていると病気のお見舞い
にして喜ばれたという声が寄せられた。辛い染色
による絵本が珍しかったのか、書評にもいくつか
取り上げられ、シリーズ絵本に続けていきたい夢
が持てた。

『かぜのこ』『あいうえおつきさま』

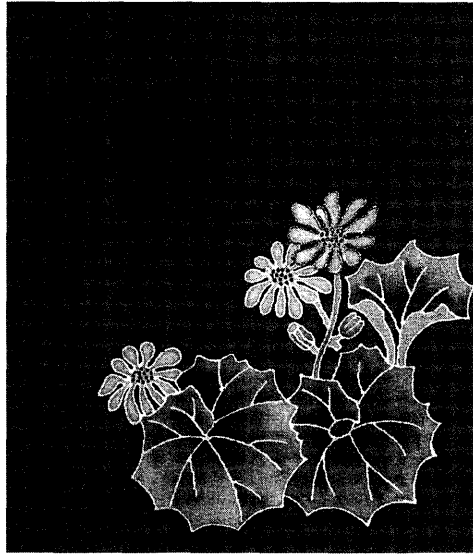
『いろとりどり』（いずれもかど創房）

と、古来から日本人の美意識の対象とされてきた花鳥風月を題材に、数年おきに出した。

「絵本の樹美術館」や「軽井沢絵本の森美術館」はじめいくつかの場所で原画が展示されたが、ある書評子ではないが「趣味的絵本」のようで、若い読者より高年齢の方のほうが反応がよかった。詩とすることばも染色も、日本の美として幼い子どもに伝えたい

と思ったが、橋渡しの大人の力がかなり必要な絵本となった。

創作絵本には、それを詩（文学）と絵画（美術）の融合という一つの芸術作品としてみたく、自己表現のひとつに絵本という媒体を選んだ



かぜ なおりますように
あした まんかい つわぶきのはな

と感じるもの、自分の価値観を他者（主として子ども）に明確に伝えようとしているもの、自分の中に深くとどまり昇華されるのを待っている「子ども」を、絵本として形象化しているようなもの、あえて分けてみると、この三つがあるよ

うだ。そして、この三つが一つの絵本に集中しているものは、絵本力“が充実している。したがって、文章と絵画をひとりの人間が創作するほうが、より善いものになるように思える。

例えば、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビット』。一〇〇年を越える年月を経て、世界中で多くの子どもたちの支持をえている。その“絵本力“を生んだエネルギーを、彼女は後日ナショナル・トラスト運動へ向け、以後絵本を創作しなくなった。先の三つから考えると、自己表現の場が変わり、メッセージを向ける子どもたちから心が移り、自然と対話していた孤独な子どもころは、今度は自然を守るために文明にぶつけられたと考えられはしまいか。

二十世紀前半に子どもたちに届いた『ペレのあたらしいふく』『一〇〇まんびきのね』『ぞうのババル』『おかあさんだいすき』『いたずらさん

しゃちゅうちゅう』『ちいさいおうち』『かもさんおとおり』『もりのなか』など絵本力のある作品は、いずれも絵と文が同じ人間から生まれている。

『だるまちゃんどてんぐちゃん』の加古里子も、読み聞かせをしていて総合的な“絵本力“を感じる作品を多く創作している。

これは林明子あれは五味太郎の絵、これはスズキコージ、ブルーナ、レイというように絵画の自己表現が卓越しているのは重要であるが、その他の二つのいずれかが秀逸であることも、時空を越えて残っていくには必要だ。レオ・レオニは自立や自己肯定というメッセージが強く前面に出ているし、長新太には、子どもころのもつ生命力の充溢を感じる。新宮晋の作品には、絵本を形とした、宇宙を見据える自己表現が『いちご』から『小さな池』へと一貫して流れている。ガブリエ

ル・バンサンの画文一致のどの作品からも押し付けがましさのない凜とした人生観を感じる。モリス・センダック、マーシャ・ブラウンの絵本力も時空を越えていくだろう。

絵と文を一人の人間が創作したほうが「絵本力」があるといったが、マーガレット・ワイズ・ブラウンやシャロット・ゾロトウ、ミヒヤエル・エンデなどが文章を担当し、絵は別な画家が担当して成功している例はもちろんある。しかし、成功例は決して多くはないのではなからうか。たいていは、文が先にできているから、画家がどのように文章を解釈し絵を描くか。また読者対象をめぐっても意見を一致させる、あるいは妥協点を見いだしていくのは並大抵なことではないと思う。それは、そのまま絵本力の薄まりを意味するからだ。『ぐりとぐら』が姉妹共作と聞くようになるほどと納得したり、『あさえとちいさいいも

うと』『はじめてのおつかい』の筒井頼子・林明子のコンビの作品や、『にぐるまをひいて』など文以上に絵の印象が深いクーニーや、挿画家としてのセンダックに凄いと感心するのは、あるいは絵本を作る大変さと楽しさとを少しは知っているからかもしれない。

(洗足学園短期大学・テリー大学)

☆本文中の四枚の絵は、絵はがき「はなともだち」(絵本からユニフェムよこはまが製作)から、詩は絵本「はなともだち」(かど創房)から転載いたしました。